

Title	ベトナム系移住者のモバイル・ライブズとことば--難民としての経験と日本での生活--
Author(s)	林, 貴哉
Citation	大阪大学, 2021, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/85287
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

論文内容の要旨

氏名 (林 貴 哉)

論文題名

ベトナム系移住者のモバイル・ライブズとことば
——難民としての経験と日本での生活——

論文内容の要旨

本研究は難民として来日したベトナム系移住者を対象とする。1978年の閣議了解により、ベトナム難民の定住を認める方針を決定して以降、2005年までに8,656人のベトナム難民が日本への定住が許可され、受け入れの際には、日本語教育や定住支援などが実施されたが、学齢期を過ぎてから来日したベトナム系移住者の場合、来日後に日本の学校に通ったり、日本語でのリテラシーを身に着けたりする機会を十分に得ることができたとはいえない。難民受け入れを行うホスト社会の視点に立つと、ベトナム系移住者の日本語能力は「問題」となるが、本研究では当事者の視点からその「問題」を捉え直すことを目的とする。本研究ではベトナム系移住者にとってのことばに対する主観的な意味づけを明らかにするために、研究方法として質的研究を採用した。そのため、序章では筆者の特性がどのように研究に反映されているのかを示すために、本研究に至るまでの背景を「私の物語」として記した。

第1章では、本研究の対象である難民として来日したベトナム系移住者の定義を示す。その上で、ベトナム系移住者の言語に焦点を当てた先行研究では、日本語習得が充分になされていないことや、日本生まれの子どもとの間のコミュニケーションが困難であることが指摘されており、言語が問題として捉えられていることを提示する。それに対して、本研究では、日本語のみを抽出するのではなく、ベトナム系移住者の生活を考慮して複数言語の使用に関する分析を行う。

また、生活の中に言語を見出すためにベトナム系移住者の生活における社会的なつながりに注目することとした。社会的なつながりには次の3種類がある。社会的結合 (social bonds) は民族、国家、宗教などが同質のグループ内でのつながり、社会的橋渡し (social bridges) は他のグループとのつながり、社会的連結 (social links) は個人と行政などの制度とのつながりを指す (Ager & Strang, 2008)。さらに、第1章では、本研究の視座となる概念である「ことば」と「モバイル・ライブズ」を示した。本研究では、抽象的客観的なラングとして言語を捉える視点に立つのではなく、発話によって行われる社会的相互作用としての言語活動に焦点を当てる (バフチン, 1980)。また、モバイル・ライブズ (アーリ, 2015) という観点から調査協力者の移動が可能になった社会構造や背景にも注目する。

第2章では、ベトナム系移住者のモバイル・ライブズを捉えるための手掛かりとなる、背景となる国際情勢と国際関係を整理する。次に、ベトナム系移住者が来日して定住生活を進めていくまでの過程を、日本政府の視点や、支援活動を行った施設や団体からの視点、さらにはベトナム系移住者の視点から整理した。

第3章では複数言語を渾然一体と用いた言語活動を捉えるための視点を示した。ベトナム系移住者の言語を、国家や民族と結びつけた特定名を持つ言語 (named language) として見るのではなく、複数の言語の要素が渾然一体となった名前のない存在としての言語 (languages as entities without names) という視点で捉えようとした (Othegui, García & Reid, 2015)。このような視点に立つことで、日本語の習得が充分か、もしくは不十分かという二極的な捉え方を乗り越えることができると考えられる。さらに、個人のことばの変化を社会的な状況を考慮しながら捉えるための視点を示すために、第二言語習得研究におけるソーシャル・ターンについて述べた後、複数言語を使用する人のアイデンティティに関する研究を取り上げた。その上で、こうした研究では、質的研究を通して、調査協力者が自身の使用する言語をどのように意味づけているかを探求しているということを示した。

第4章では研究方法論と調査概要について述べた。ライフ (人生・生活) に関する質的研究には、ライフストーリー研究があり、その中でも複数の方法があることを示したが、本研究では「ナラティブ分析」 (Polkinghorne, 1995) を行うことで、インタビューで語られた出来事を筋立て、産物として「ライフストーリー」を作り出すという方法を採る。本研究では4人のベトナム系移住者に対してインタビュー調査を実施した。ストーリーを作成する際に参照するために、インタビュー調査と並行して、ベトナム人集住地域のカトリック教会やベトナム仏教寺院、外国人支援団体などにおいてもフィールドワークを行い、ベトナム系移住者が日本語で出版した自伝的な物語も分析の対象とした。

また、第4章では序章で提示した「私の物語」とも関連づけながら、調査を進める中で問いの立て直しを行った経緯

を述べた。その上で、本研究のリサーチ・クエスチョンとして、難民として来日したベトナム系移住者は(1)どのような移動を経験してきたか、(2)どのような社会的なつながりの中で移動してきたか、(3)それぞれのつながりの中で、どのように言語活動に従事してきたか、の3つを定めた。

第5章では、日本語で出版された3人のベトナム系移住者の自伝的な物語を分析した。3つの物語には構成や内容に共通点があった。物語ではまずベトナム戦争が終結した1975年4月30日以降に、自由を奪われた経験が述べられ、そして、ベトナムからの出国を果たして以降は自由の獲得の物語となっていた。しかし、脱出後には希望する定住先には行けず、不本意ながら来日することになり、定住開始後には、日本語の困難、会社や学校における困難を抱えることになった。3つの物語の人物は、支援団体や宗教者による支援を受けながら努力して日本語習得や受験勉強をすることで、大学進学を果たした。その後、2人は医者、1人はカトリック教会の神父となり、日本国籍を取得した。

第5章で示した3人の物語では、家族以外の同じルーツの人との間での言語活動従事に関しては焦点が当てられていなかったが、第6章から第9章では、日本語だけでなく、複数の言語使用にも焦点を当てたインタビュー調査の結果に基づいて、4人のベトナム系移住者のライフストーリーを描いた。

Pavlenko (1998) では第二言語学習には「喪失」と「(再)構築」が伴うと指摘されていたが、ライフストーリーを示した4人の共通点を述べると、1975年の政変やベトナムからの出国を機に「喪失」を経験しており、日本での生活は「(再)構築」への道のりであると捉えることができる。生活の再構築のためには、就労によって収入を得ることや、ベトナムでは禁止された宗教活動の再開、そして、家族の再会や形成などが行われる。亡命の際には、親子や兄弟、親戚といった家族・親族と共に移動している場合もあれば、移動の過程で結婚や出産を通して新たな家族を形成していく場合もある。さらに、来日時に学齢期以前であった子どもや日本生まれの子どもが家族にいる場合、そこから日本の病院や学校とのつながりも生じてくる。活動の種類によって、言語への依存度や依存の仕方が異なり、程度の差はあるが、あらゆる活動は言語が仲立ちをしており、生活において様々な言語活動に従事することになる。

第10章では第5章から第9章のライフストーリーを踏まえて、社会的なつながりを整理した上で、(1)誕生から現在までの生涯を通じた移動と、(2)複数の社会的なつながりの中での移動という2つの観点から考察を行った。

社会的なつながりの中で、インタビューにおいて多く語られていたのは、社会的結合と社会的橋渡しに関連するエピソードであった。第10章ではまず、家族のつながり、宗教的なつながり、仕事でのつながり、その他の社会的なつながりという分類に基づいて語りを整理した。

その上で、(1)誕生から現在までの生涯を通じた移動という観点から、来日前の生活から現在までの生活を包括的に分析することで、「日本語を習得して日本社会に適応していく」という視点を乗り越えることができた。難民として来日したベトナム系移住者は、ベトナム戦争や、その終結による政変を受けて、それまでは当たり前だったことが覆され、否定された経験を有する。そのような移動の経緯を考慮すると、ホスト社会側の視点からは日本社会との関係を断っているように見える、ベトナム語を中心とした宗教実践などの活動も、ベトナム系移住者にとっては必要不可欠な言語活動であるということがわかった。

(2) 来日後の生活の中での複数の社会的なつながりの中での移動に関する考察からは、多文化共生の文脈で言語を捉える際の留意点を論じた。多文化共生を考える際には、「日本で生まれ育ち、日本語を話す日本人」というマジョリティと「ベトナム人集住地域に暮らし、ベトナム語を話すベトナム系移住者」というマイノリティが想定され、コミュニティとコミュニティが共生するという捉えられ方がされることがある。そして、この図式のもとで言語について考えようとする、それぞれのコミュニティに伴う「特定名を持つ言語」の存在が前提とされてしまう。一方で、個人と個人が社会的なつながりの中で言語活動に従事する際に「名前のない存在としての言語」を行使していると考えると、これまで自明とされてきたコミュニティのあり方を捉え直すことができる。

他国から来た人を受け入れるという議論では、国籍や出身地を基準としてコミュニティが想定されることが多いが、例えば、カトリック教会に集うカトリック教徒の日本人とカトリック教徒のベトナム系移住者の場合は、国籍や出身地という基準のもとで比較を行うと、差異が顕著となるが、いずれの人々もカトリック教徒であるという点は共通している。日本での定住を開始した当初は日本語がわからなくてもミサに参加していたという語りからわかるように、宗教的实践を行う際に使用する言語等の違いはあるが、いずれの人々もカトリック教徒としては同様の宗教実践を経験してきており、言語を越えて同じ活動に従事している。このような事例から、ホスト社会の主流言語の習得が充分か、もしくは不十分かといった二項対立的な捉え方に対する代替的な視点として、対話をする人同士が共通して利用できる言語的なリソースが限られていたとしても、そこで排除し合わずに、名前のない存在としての言語を行使して言語活動に従事できるかどうかという視点を示した。

終章では、本研究のまとめを行い、ライフストーリー研究として発展させる上での今後の課題を示した。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (林 貴 哉)			
	(職)		氏 名
論文審査担当者	主 査	教 授	義 永 美 央 子
	副 査	教 授	西 口 光 一
	副 査	准教授	小 川 敦

論文審査の結果の要旨

本論文は難民として来日したベトナム系移住者（以下、ベトナム系移住者）の言語活動従事に関する経験を、移動の経験や社会的なつながりを考慮しながら記述し、日本社会における多言語・多文化共生の現状や方向性を考究するものである。特に学齢期を過ぎて来日したベトナム系移住者については、多くの先行研究で日本語能力やホスト社会への参加の少なさが「問題」として指摘されている。しかし本論文は当事者の視点からその「問題」を捉え直し、質的研究の方法を用いてベトナム系移住者のことばに対する主観的な意味付けを明らかにすることを目指している。

序章で筆者の特性や問題意識がどのように研究に反映されているかを論じた後、第1章では本論文におけるベトナム系移住者の定義と研究枠組みが示される。本論文では、ベトナム系移住者を移動の中にある複数の人生・生活、すなわちモバイル・ライブズを生きる人びとと位置づけ、彼・彼女らの人生の軌跡やそこで実際に行使されることばを描き出そうとする。続く第2章では、ベトナム系移住者が来日して定住生活を進めていくまでの過程を、背景となる国際情勢と国際関係、日本政府ならびに支援活動を行った施設や団体、さらに当事者であるベトナム系移住者それぞれの立場から整理する。そして第3章では、ベトナム系移住者の言語活動を捉えるための視点として、複数の言語の要素が渾然一体となった名前のない存在としての言語 (languages as entities without names) という概念が提示される。第4章では本研究で採用された質的研究の方法論を検討する。調査協力者の主観的な意味を明らかにする質的研究方法の一つであるライフストーリー研究、特にインタビューで語られた出来事に対し、「物語の様式」を用いてストーリー化を行うナラティブ分析の手法を論じ、本論文でのリサーチ・クエスチョンが提示される。日本語で出版された3人のベトナム系移住者の自伝的な物語を分析した第5章に続き、第6章から第9章では、インタビュー協力者4名のライフストーリーを記述している。4名のライフストーリーの共通点として、1975年の政変やベトナムからの出国を機に何らかの「喪失」を経験しており、日本での生活は「(再)構築」への道のりと捉えられていることが指摘できる。生活の再構築のために、就労による家計の維持、ベトナムでは禁止されていた宗教活動の再開、家族の再会や形成など、さまざまな活動が行われる。活動によって言語への依存度や依存の仕方は異なるものの、あらゆる活動を言語が媒介しており、ベトナム系移住者の生活は様々な言語活動に従事することで成り立っていることが明らかになった。

第10章では第5章から第9章の記述を踏まえ、社会的なつながりの中でも特に多く語られた社会的結合と社会的橋渡しに関連するエピソードを中心に、(1) 誕生から現在までの生涯を通じた移動、(2) 複数の社会的なつながりの中での移動、という2つの観点から考察が行われた。1つ目の観点からは、社会的なつながりの中で主体的に言語活動に従事し、コミュニティの正統なメンバーとして生きるベトナム系移住者の姿が示されている。難民として来日したベトナム系移住者は、ベトナム戦争や、その終結による政変を受けて、それまでは当たり前だったことが覆され、否定された経験を有する。そのような移動の経緯を考慮すると、ホスト社会側の視点からは日本社会との関係を断っているように見える、ベトナム語を中心とした宗教実践などの活動も、ベトナム系移住者にとっては必要不可欠な言語活動であることが明らかになった。2つ目の観点では、ベトナム系移住者のことばを、国家や民族と結びつけた「特定名を持つ言語」ではなく、複数の言語の要素が渾然一体となった「名前のない存在としての言語」と捉えることにより、日本人対外国人、または日本語の習得が十分か不十分か、という二項対立的な見方を乗り越えることを主張する。日本での定住を開始した当初、日本語がわからなくても教会のミサに参加していたというカトリック教徒のベトナム系移住者の語りは、ある宗教の教義や宗教的实践に関する知識を共有していれば、必ずしも十全な言語的知識が

なくとも当該コミュニティやそこでの活動に参加が可能であることを示唆している。このように、具体的な状況の中で利用可能なリソースを行使して活動に従事していく中で、国籍や民族といった差異を越えた関係性を構築できるという展望が示されている。

本論文は第二言語習得研究を出発点としながらも、社会学、言語哲学、社会福祉学など、幅広い領域の先行研究を渉猟し、説得力のある論を展開している。また長い時間をかけ、ベトナム系移住者のコミュニティならびにベトナム系移住者一人ひとりとラポールを築きながらデータ収集を行った結果、社会的なつながりの中で主体的に言語活動に従事する、新しいベトナム系移住者の姿を描き出すことに成功している。多言語・多文化共生を可能にする社会制度やソーシャル・キャピタルに関する言及が少ない、具体的な政策や施策の提言は控えられているといった面はあるが、ホスト社会への同化的な適応を前提とする立場とは一線を画す知見を提供しており、顕著な意義を有する学術的研究であると評価できる。

以上のように、本論文を博士（言語文化学）の学位論文として価値のあるものと認める。

なお、チェックツール“iThenticate”を使用し、剽窃、引用漏れ、二重投稿等のチェックを終えていることを申し添えます。